



Help you? その一言で社会が変わる

～障がいは個性 遠慮せずにまずは声をかけて～

12月3日から9日までは「障害者週間」です。

同じ町でともに暮らす仲間として、ともに過ごすために必要なことを考えてみませんか？

皆さんは「パラサーフィン」をご存じですか？障がいをお持ちの方が楽しむサーフィンのことです。

今回は、世界障害者サーフィン選手権大会で2位に輝いた経歴を持つ、町在住の勝倉 直道さんにお話を伺いました。

勝倉さんは、子どもの頃からスポーツが大好きで、17歳からサーフィンを始めました。31歳の時に、交通事故によって重度の火傷を負い、皮膚拘縮両下肢機能障害（火傷の影響により、足の組織が硬化し、足の関節の可動域に制限がある状態）となりました。

3年間の血のにじむようなリハビリを経て、51歳の時にインターネットで見たパラサーフィンの大会に感銘を受け、パラサーフィンを始め、パラサーファーとしての現在に至ります。



様々な障がいを持った人たちが、心から楽しそうにサーフィンを楽しんでいる姿を見て、とても感動しました。

周囲からの後押しもあり、次のワールドカップに出場しよう、パラサーフィンに挑戦しようと思えました。

○みんなには、こういうところから変わってほしいということとありますか？

まず自分と違う人を認める心を持ってほしい。

認めることで、人の目を気にすることなく、他の方への助けけにつながると思います。

私は、余計なことだろうが周りに何言われようが自分がいいと思ったら行動しちゃうんですよ。きっとそれがいい方向に必ず動いて僕はいつも信じてますね。

日本人は良いことも悪いことも「遠慮」があると思います。心の中では、あの人に手を貸したほうがいいのかなと思うけれど、でも明確に困ってなさうだから大丈夫だと思ってしまいますよね。

○事故によって、サーフィンに欠かせない足の自由が利かなくなった時の気持ちは？

事故後1〜2か月は、自分の足の現状が把握できなくて、すぐ退院して普通に動ける、走れるものだと思っていました。障がいを受け入れるまで半年以上かかりました。それでも、サーフィンを「もう一回やってみない」、以前のように絶対できないことは分かっているけど、それに近づくという一心でリハビリをしていましたね。

○パラサーフィンを知ったきっかけは？

事故後、仲間にボディボードを勧められましたが、もう一度ボードに立ってサーフィンがしたかったんです。

それこそ、自分と同じような障がいを持っていても、サーフィンをしている人がいるんじゃないかと思い、インターネットで検索したらパラサーフィンのワールドカップの動画を見つけたんです。

そんな場面でも、海外では当たり前のように「Help you?」って声をかけてくるんですよ。

その一言が相手を助けることでもあります。お互いに悪い気持ちにはならないし、気持ち良くその瞬間を終えられます。

その一言で社会や世の中が変わる良いきっかけになるかもしれないですね。

○最後に今後の目標は？

パラリンピックに出場することです。パリ五輪ではパラサーフィンが競技種目選ばれず、心が折れかかりましたが、今は、ロサンゼルスでのパラリンピック実現に向けて準備を進めています。

